毎日新聞

25　京都　2003年（平成15年）11月19日（水曜日）　読者とと

京の人 今日の人

「生」を実感できる場に

京大植物園考える会で活動

左京区・百万遍そばの京都大キャンパス。コンクリート校舎が建ち並ぶ一角に、昼なお暗い林がある。京都大理学部付属植物園。1925年設立、面積1・8ヘクタール弱。過度に手を加えず、自然に近い「生態植物園」として教育研究の場を長年提供してきた。

総合地球環境学研究所（上京区）の非常勤職員、今村彰生さん（30）は、研究者や市民でつくる「京大植物園を考える会」のメンバーとして観察会を開くなど精力的に活動している。自身も京大理学部出身。木の根と共生するキノコやカビ類「菌根菌」の専門家だ。

昨年末、植物園に異変があった。管理する理学部植物学教室が、周辺宅地への落ち葉対策などを理由にヌマスギなどの大木を伐採した。「木は何十年もここで生きてきた。生き物の研究者がなぜ、平気で木を切り倒すのか。信じられなかった」。同じ思いの人々が今春結成した「考える会」に参加した。

伐採問題は大学植物園の危機を象徴しているとの思いがある。間近に迫る大学法人化。「金銭換算されて『植物園などムダ』と潰されかねない」と憂える。

園の樹木は約500種。生きた化石「メタセコイア」や旧植民地・台湾産の木などそれぞれに歴史と物語を持つ。都会に浮かんだ緑に昆虫や鳥が集まる。「身近な研究フィールド、市民の憩いの場、生物の避難所。百年の計で考えるべき価値がある」

16日には、市民利用のあり方も含め植物園の将来像を考えるシンポジウムを開いた。「春に芽吹き、花を咲かせて秋には実が落ちる。『生』を実感できる場所として植物園を守っていきたい」

「考える会」のホームページは、http://members.at.infoseek.co.jp/bgarden/

【野上哲】

京の人 今日の人